

地域横断的に見る劇場上演の変遷 データベースの利活用から

科研費研究「ヨーロッパ音楽劇上演の変遷と伝播：言語と地域の横断的研究」成果公開出版に向け、公開ミニシンポジウムの形で内容検討を行います。ご参加をお待ちしています。

日時：2024年1月21日（日）13:00～15:00

場所：オンライン（Zoom）

発表：大河内 文恵（東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校）

小石 かつら（関西学院大学）

荒又 雄介（大東文化大学）

岡本 佳子（神戸大学）

司会：神竹 喜重子（東京藝術大学）

コメント：坂部 裕美子（統計情報研究開発センター）

辻 昌宏（明治大学）

申込：オンライン申し込み専用フォーム

<https://kobe-u-ac-jp.zoom.us/meeting/register/tZMvd-uhH4rH9ym9RajH7dGpT2jrgP8M4UX#/registration>



※ 右のQRコードからお申し込み可能です。お申し込みが承認された後、Zoomにアクセスするための情報をご送付いたします。

発表タイトル

大河内文恵 18世紀後半～19世紀初頭にかけてのドイツ諸都市におけるオペラ上演演目の流動性について（仮題）

小石かつら ニューイヤー・コンサートの特殊性：19世紀前半のライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラム構成から

荒又 雄介 グスタフ・マーラー 宮廷歌劇場監督の一年

岡本 佳子 リストのオラトリオ《聖エリーザベトの伝説》にみる歌劇場の機会上演

主催：

科研費研究課題 基盤C ヨーロッパ音楽劇上演の変遷と伝播：言語と地域の横断的研究（19K00150；代表：岡本佳子）

お問い合わせ： okamoto_y@people.kobe-u.ac.jp

岡本 佳子（国際文化学研究科・講師）

発表要旨

18世紀後半～19世紀初頭にかけてのドイツ諸都市におけるオペラ上演演目の流動性について（仮題） 大河内文恵

18世紀半ばのドイツ諸都市で宮廷オペラが盛んだったところでは、宮廷楽長もしくは宮廷副楽長がオペラ作曲の大半を担っていた。いずれの都市も七年戦争後にオペラ制作が宮廷内に限られなくなり、同じオペラを他の都市でも上演するというレパートリーの共有が頻繁にみられるようになる。これらの共有されたレパートリーを1770～1830年のドイツの都市のオペラの上演データベースを使って、作曲者、上演劇場、レパートリーの共有のありかたなどの観点から分析を試みる。

ニューイヤー・コンサートの特殊性：19世紀前半のライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のプログラム構成から 小石かつら

ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団は1781年から年間約20回の演奏会を開催してきた。その中で1月1日の新年の演奏会は、他の演奏会とは異なるプログラムが組まれてきたが、とりわけ1822年にベートーヴェンの《英雄》が演奏されてからは、ほぼ全例でベートーヴェンの交響曲が演奏会のメインとなった。しかも1837年以降は《運命》に固定されたのだ。本発表は「新年は《運命》」という伝統が、いかに確立していったのかを詳らかにするものである。

グスタフ・マーラー 宮廷歌劇場監督の一年 荒又雄介

1897年にウィーン宮廷歌劇場の監督に着任すると、マーラーは次々と新機軸を打ち出した。これには演目の刷新ばかりでなく、ノーカット上演、演者への高い要求水準、さらには観客の観劇の仕方が含まれる。本発表は、歌劇場の上演ポスターに掲載される「観劇心得」と、当時の新聞文化欄を新資料として、若干37歳の劇場監督をウィーンの観客がどのように受け止めたかを考察する。

リストのオラトリオ《聖エリーザベットの伝説》にみる歌劇場の機会上演 岡本佳子

フランツ・リスト《聖エリーザベットの伝説》（1865年初演）は、舞台演出を伴わないオラトリオであるが、20世紀前半まで各地でオペラのように演出付きで上演されていた。本発表ではとくにハンガリーに焦点をあて、本作品の主題である「ハンガリーの聖エリーザベト」や、王妃エリーザベトとの結びつき、リストの国民的作曲家としての顔に焦点を当てながら、本作品の受容史と上演意義の変容を辿る。